

一 聚楽行幸和歌 一卷

京都国立博物館蔵

烏丸光広筆

彩箋墨書 縦三〇・〇cm 全長一二五四・五cm

〔図版三〕

二 定家・良経和歌 双幅

京都 法雲院蔵

烏丸光広筆

彩箋墨書 各 縦一二二・〇cm×横五四・〇cm

〔図版三〕

一、聚楽行幸和歌

後陽成天皇は、豊臣秀吉の奏請によって、天正十六年（一五八八）四月十四日から同十八日まで、その居城聚楽第に行幸されたが、その十六日には盛大な和歌御会が催され、それは後に聚楽行幸和歌と呼ばれて名高い。

これはその和歌を烏丸光広（天正七ノ寛永一六・七・一三）が書写したと考えられるもので、詳細は以下の通りである。

現状は全十紙を継いだ巻物で、その表装は渋茶染絹地に金銀切箔砂子で雲霞文散、銀泥で菊花文を描き、見返は無地金箔のほぼ正方形（縦三〇・三センチメートル、横三〇・四センチメートル）で、表の裂、見返とも当初のものと考えられる。しかし標記題箋は当初のものでなく、縦約五センチメートル程の紙片を貼って聚楽城行幸和歌号とあり、おそらく、明治二十四年（一八九一）京都府より帝国京都

博物館へ移管された頃、事務的に貼られた外題箋と考えられる。

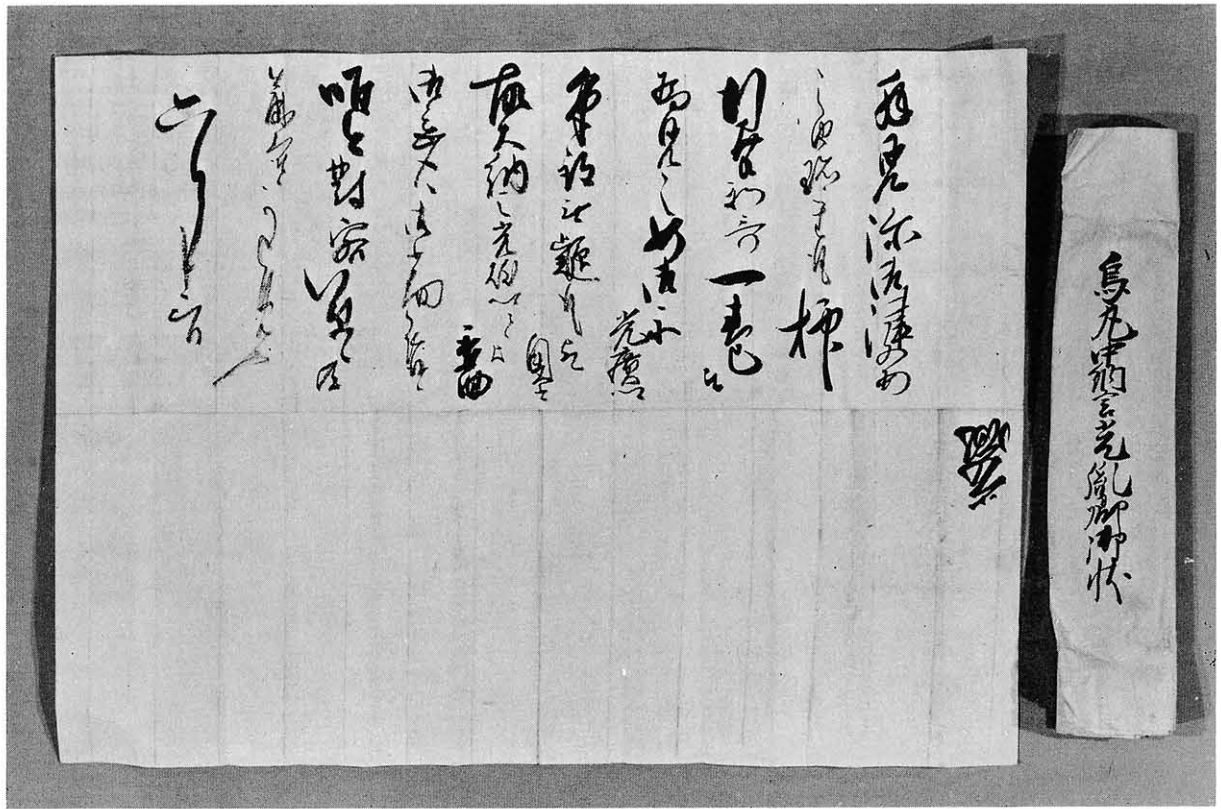
料紙は雁皮まじりの楮紙で、各紙の長さは

	横
見返	30.4
第1紙	134.4
2	136.8
3	137.0
4	137.0
5	137.0
6	137.0
7	136.6
8	136.5
9	135.7
10(跋)	26.5

となっていて、右の通り、平均一三七センチメートルと長い紙が用いられているが、これは後述のように料紙に型の長い装飾文様をつける必要からとくに長い紙を用いたものらしい。

料紙には下絵地色として青磁（薄青色）香（薄肌色）、丁子（薄茶色）の諸色を、だいたんに斜、横、或いは縦に交互に下地に上染めし、それに木版で藍、萌黄、山鳩、黄檀染などで菊文様を丸形にあるいは半円形に、型押散らし、この下地の斜直線と 菊丸文との対比的な妙を形作っている。そこに用いられている版型の菊吹絵文様は、直径一四センチ、それぞれ十九花弁の菊花を三重ねにしたいわゆる三重菊の文様で、烏丸光広筆とされる作品に共通してよく用いられており、これは家紋というよりは、どこの家紋にもさしさわりのない文様として烏丸光広が好んで用いたものと思われる。この素朴ながらも奔放、直截明快な文様は、光悦慶長期と目される作品の下絵文様などと共通した気風をよく示している。

本文の聚楽行幸和歌は、群書類従巻第四十一所収の『聚楽第行幸記』（旧本行書体）に前河内守正虎朝臣とあるものの所収和歌とほぼ同じく、全六十四首の和歌をかなと漢字（草書）の混りでかいたもので、一首三内至四行程度、部分によっては一首十行ほどに散らし書したところもある。一行約十字、一紙約八首平均の和歌自体は、全九紙に書



写されているが、巻末に光広の署名等はなく、第十紙に同色文様の料紙一紙を継いで、

烏丸光胤之亂御状

鑑

此一巻攤来則光広卿手澤也。命ニ頂重一書ニ之後一末葉藤花押とある。この末葉とあるのは付属極の通り烏丸光雄（権大納言従二位元祿三年十月廿七日歿四四歳）と考えられるが、この内容の文句からみて光雄自らかいたものでなく側近の頂重にかかせたものと考えられる。

この一巻には、付属として烏丸光胤（安永九年九月十八日五十八歳歿）の極書が一通入っていて、これを光広の筆跡と鑑定している。

附属、烏丸光胤極状

拜見弥御健安

之由珍重存候柳

行幸和歌一卷之

極見之如ニ御示一

光広卿

筆跡無レ疑存候之は

奥書

故大納言光雄卿に候敷

委曲

御念入候御書面に被レ存候

唯今対客 早々及ニ

麁上候 可ニ返進一候也

六月十六日

光胤

なおこの作品は、京都国立博物館のもっとも早い前身である、帝

国京都博物館は明治二十二年創設されたが、同二十四年、京都府より最も早く引継がれた物件のうちの一点で、京都国立博物館の歴史と共にあった由緒深いものである。

さて烏丸光広(天正七〇寛永一五・七・一三)は、准大臣光宣の嫡男で、烏有子と号した。慶長十一年(一六〇六)二十八歳で参議兼右大弁となり次いで左大弁に転じたが、同十四年七月宮女事件により勅勘をこうむり解官された。その後三年を経て同十六年勅免され、翌十七年正月には権中納言に、元和二年(一六一六)二月には権大納言に進み、寛永十五年六十歳で歿した。光広は和歌を細川幽齋に学んでこれに長じ、また書画、茶湯、詩文、連歌等にも広く秀でた多才の人であった。その書は上代様の基礎の上に、軽妙、奔放な運筆で独特の書風を生んだ。すなわち光広ははじめ青連院流を学んだが、その後、灰屋紹益(一六〇七—一六九二)の『にきはひ草』(一六八二刊)、『古今諸流後学之能書』などで知られるように本阿弥光悦の伝授をうけたと考えられている。

その他歌人の間に風靡していた定家様をも習得したようであるし、何より「烏丸切後撰集」に知られるように古筆の愛好家でもあったし、また「古筆名葉集」の序に「烏丸光広卿はじめて了佐というものに命じて古筆目利の名を唱えしむ」とあるように、光広自身、古筆の鑑識に長じ、古筆了佐に鑑定の秘伝を教えたという(慶安手鑑序文—一六五一—)。

こういった基礎の上に、光広独創性に富んだ独特の書風が創始されたものと考えられる。

烏丸光広の著書については、深沢三寛氏「烏丸光広伝」(近世国文学第一輯所収)に詳しく、散文類で見覚し草、日光山紀行、あつまの道

の記、春の曙など二二件、歌書類で、黄葉和歌集、歌人歌仙など四件が紹介されており、

光広の遺墨としては「東行記」(東京国立博物館蔵を光広中の傑作として、助弘倫子氏が墨美一八五号(墨美社)に、また角井博氏も、同作品を日本名品叢刊第三号(二玄社)に紹介されている。なお助弘氏は、前掲墨美一八五号において、遺品目録として、新古今集一卷以下二二件を紹介されたのを始め、小松茂美博士が、和歌懐紙、詠草、短冊、書状など五四点を(日本書流全史図版一三七—一四二四・講談社)、また同氏監修日本書蹟大観第十五巻に和歌懐紙以下十一件ほど紹介されている。以上のうち、重複する分を除くと、約六十点程が紹介されてきたといつてよい。そのほか、一、二の図版では各書に掲載されているが、まとまったものとしては、ほぼ前掲に要約できよう。

以上の遺品を通観した上で、この和歌巻はいかに評価されるべきであろうか。

まずこの和歌巻の書かれた時期から考えると、書かれた年紀はないが、聚楽行幸のあったのが、天正十六年(一五八八)で、烏丸光広はこの時、まだ十歳、ところでこの書風から一見してとても幼年期のものとは見えない。

光広の遺墨としては、前述のように相当数が知られるのであるが、書写年を明記したものは少い。しかし幸いなことに和歌懐紙では左少弁(文祿三年(一五九四)十六歳)、参議左大弁(慶長十四年(一六〇九)三十一歳、又ハ慶長十六年(一六一一)三十三歳還任)、権大納言(元和六年(一六二〇)四十二歳以降寛永十五年(一六三八)六十歳歿年まで)と、官位の記されたものがあり、また詠草に寛永丙子(^{十三年}一六三六年)五十八歳や、

寛永丁丑^(十四年)(二六三七・五十九歳)などがあり、書風の移り変りはある程度、窺い知ることができる。その他嵯峨本風木版下絵の光広色紙など、関連する資料も合せ考えると、慶長十四年(一六〇九)左大弁三一歳頃の頃、光広はかなり奔放な生活をしており、遊蕩的生活の中で、同年七月集団的姦淫事件として、後陽成天皇の勅勘を蒙り罪に処せられ、その後家康らの懇願を得て慶長十六年(一六一一・三十三歳)で還任するわけであるが、書風の上でも、その頃のものがもつとも奔放、活発であったことが窺われる。元和二年(一六一六)権大納言(三十八歳)以降の作品の筆致は、ややおだやかな風で、以降、枯淡といったやや老成した書風を呈する。

ところで、この京博本、聚楽行幸和歌に見る筆蹟特徴は、他の光広自筆資料と一見して同筆と認められるものであり、しかも、その奔放活発な筆致は、明らかに、すなわち三十歳と認められる懐紙の書風に極めて近く、また、下絵文様の上からも、前述の如く、その頃に矛盾しないものであり、以上から、この聚楽行幸和歌は、最も光広の独創性豊かな活達奔放な面目を如何なく發揮した桃山慶長期目とされる逸品と考え、後述の作品とともに紹介しておきたい。

一、定家・良経和歌

この作品は、京都法雲院(京都市右京区太秦蜂岡町一七)所蔵のもので烏丸光広が、藤原定家の拾遺愚草上所収「初冬同詠二百首和歌」春二十首のうち「題、三島江の波に棹さすたをやめの春の衣の色ぞ移ろふ」の一首と、後京極良経の秋篠月清集二所収「院初度御百首のうち題祝、呉竹の園より移る春の宮兼ても千代の色は見えにき」

の二首を、烏丸光広が好んで用いた彩箋料紙に、当初より豎幅一對になるよう、かな漢字まじりの流麗な草体で大書したものである。

この料紙はさきの聚楽行幸和歌巻と同じく、料紙を青磁(薄青色)に染め、それに木版で、十九花弁三重菊文を山鳩色に吹絵しており、烏丸光広の書巻に特有のものである。

定家の和歌をかけた幅の方に三箇、後京極良経の和歌の方に二箇、右上方より左下方方向に散らし、上にかかれた書とよく調和している。この料紙、下絵文様、書風は、さきの聚楽行幸和歌と全く極似するもので、製作時期も、聚楽行幸和歌とほぼ同じ、慶長期、光広三十歳頃のものと考えられ、さきの聚楽行幸和歌と対比できる作品であり、当初より掛軸にするべくかかれたその文字の大きさなどから、鑑賞性という点では、聚楽行幸和歌巻以上の出来栄えといつてよいように思われる。

(京都国立博物館寄託中)

みしま

定 江の浪にさほさす

家 たをやめの

春のころもの色ぞ

うつろふ

後京極 呉竹の

撰政 そのよりうつろ

春の宮

かねても千代の

(木下政雄)

Handwritten Japanese calligraphy in two columns. The right column contains several lines of text, including the characters "阿彌陀佛" (Amitayus) and "南無阿彌陀佛" (Namu Amida Butsu). The left column also contains multiple lines of text, with some characters appearing to be "松" (Matsu) and "竹" (Take).

Handwritten Japanese calligraphy in two columns. The right column features a large, stylized character, possibly "松" (Matsu), and other smaller characters. The left column contains several lines of text, including the characters "松" (Matsu) and "竹" (Take).

Handwritten Japanese calligraphy in two columns. The right column contains several lines of text, including the characters "松" (Matsu) and "竹" (Take). The left column also contains multiple lines of text, with some characters appearing to be "松" (Matsu) and "竹" (Take).

前記の通り
松の木の葉は
くさくさとした
色に変わるや
右の葉は
松の木の葉は
くさくさとした
色に変わるや
右の葉は
松の木の葉は
くさくさとした
色に変わるや
右の葉は

右の葉は
松の木の葉は
くさくさとした
色に変わるや
右の葉は
松の木の葉は
くさくさとした
色に変わるや
右の葉は
松の木の葉は
くさくさとした
色に変わるや
右の葉は
松の木の葉は
くさくさとした
色に変わるや
右の葉は

右の葉は
松の木の葉は
くさくさとした
色に変わるや
右の葉は
松の木の葉は
くさくさとした
色に変わるや
右の葉は
松の木の葉は
くさくさとした
色に変わるや
右の葉は
松の木の葉は
くさくさとした
色に変わるや
右の葉は

Handwritten Japanese calligraphy in cursive style (sōsho). The text is arranged in vertical columns, reading from right to left. A large circular floral motif is visible in the upper right quadrant. The characters are fluid and expressive, typical of the Edo or Meiji periods.

Handwritten Japanese calligraphy in cursive style (sōsho). The text is arranged in vertical columns, reading from right to left. The characters are fluid and expressive, typical of the Edo or Meiji periods.

Handwritten Japanese calligraphy in cursive style (sōsho). The text is arranged in vertical columns, reading from right to left. The characters are fluid and expressive, typical of the Edo or Meiji periods.

